

“NIDS NEWS”



防衛研究所企画部企画調整課 (03-3713-5912)

..... 2016年1月の主な出来事

《 鈴木所長年頭の辞 》



1月5日、防衛研究所内で年始行事が行われました。鈴木防衛研究所長は「年頭の辞」において、年初から国際情勢が緊張、激動を予感させる動きが出ているものの、防研としてはこれまでに培った知識、経験を活かして調査研究に取り組んでいきたいと述べました。

そのうえで、第一に8月に迫っている市ヶ谷移転について、これをチャンスとして捉え、防研の今後、50年、100年の発展のための基

礎を作るんだという気概で、この大事業に取り組んで頂きたい。第二に、中谷大臣が言われているように、防衛省・自衛隊として情報発信が非常に重要であり、防研としても様々な機会を捉え、的確かつ印象的な発信に努めてほしい、と要望しました。また健康、とくにメンタル面について自分自身、同僚、部下への配慮、気配りを心がけて、職務に邁進して欲しいと述べました。

《 グローバル安全保障セミナーの開催 》

1月7、8日の両日、スコット・ペース米国ジョージ・ワシントン大学宇宙政策研究所（SPI）所長をお招きして、グローバル安全保障セミナーを開催しました。本セミナーでは、「米国の宇宙安全保障政策」（7日）、「宇宙安全保障に関する日米協力」（8日）をテーマにペース氏が報告を行い、その後は参加者を交えて活発な質疑応答と議論を行いました。米国は安全保障目的の宇宙利用を世界的に主導している国であり、宇宙安全保障に関する協力も熱心に進めています。一方、日本は2015年の第3次宇宙基本計画において宇宙安全保障の確保を重点課題として位置付け、その一環として宇宙協力を通じた日米同盟の強化に取り組んでいます。ペース氏は宇宙政策研究の世界的な権威であり、本セミナーは米国の政策や日米協力に関する考察を深める貴重な機会となりました。

《 アジア太平洋安全保障ワークショップの開催 》



1月26日から27日にかけて、防衛研究所において平成27年度アジア太平洋安全保障ワークショップが開催されました。本ワークショップは、アジア太平洋諸国が直面する安全保障の課題等について、当該諸国の安全保障研究者が立場を明確にしながらか議論を行うものであり、海外からの招へいだけでなく、防衛省・自衛隊をはじめとした政府関係者や有識者を交えた国際会議としての特徴も有しています。今年度で7回目を数える本ワークショップは、「ア

ジア太平洋諸国の安全保障課題と国防部門への影響」をテーマとして開催され、以下の11名の研究者から報告が行われました。

報告者一覧（発表順・括弧内は分析対象国）

ホアック・クン	メンリー・J・クアッチ大学副学長	(カンボジア)
イース・ジンダルサ	戦略国際問題研究センター(CSIS) 研究員	(インドネシア)
ベニー・テ・チェン・グアン	マレーシア科学大学上級講師	(マレーシア)
ティン・モン・モン・タン	東南アジア研究所(ISEAS) 客員上級研究員	(ミャンマー)
アリス・アルガイ	戦略開発問題研究所(ISDS) 所長	(フィリピン)
ラム・ペン・ア	シンガポール国立大学東アジア研究所(EAI) 上級研究員	(シンガポール)
ティティナン・ポンスヒラ	チュラロンコン大学安全保障問題研究所(ISIS) 所長	(タイ)
チャン・チュオン・トゥイ	外交学院東海研究基金会会長	(ベトナム)
由 冀	マカオ大学教授	(中国)
ダンバ・ガンバット	戦略研究所(ISS) 所長	(モンゴル)
山添 博史	防衛研究所主任研究官	(日本)

報告者は、2015年において各国が抱える安全保障上の重要課題を明らかにした上で、それらの課題が国防政策や防衛力整備に与える影響の大きさや、地域防衛協力の可能性について言及した後、活発な質疑応答を行いました。総合討議では、国内の政治変動とその展望、東南アジアにおけるイスラム過激派によるテロ問題の再燃、南シナ海を中心とする海洋問題と対米・対中関係、日本の地



域安全保障に関する認識等について議論が交わされました。

本ワークショップの報告内容は、毎年次年度に報告論文集を作成しており、防衛研究所ウェブサイト「国際共同研究シリーズ (http://www.nids.go.jp/publication/joint_research/index.html) において公開しています。

《 バルト3国有識者の来訪 》

1月28日、バルト3国の有識者が来訪し、鈴木所長、坂口研究幹事らと意見交換を行いました。エストニアからユハン・パルツ国会議員（元首相、元経済通信大臣）、アンドレス・カセカンプ タルトゥ大学政治学研究所教授、ラトビアからレッツ・プレースムス外務省二国間関係第2部長、アンディス・クドルス東欧政策研究センター長、リトアニアからロベルタス・シャプロナス国防省国際関係任務局長、トマス・ヤネリウナス ビリニュス大学国際関係政治学研究所教授が来訪しました。6名は、今回第8回目となる日・バルトセミナー「日・バルト3国の外交政策—欧州が直面する課題への対応」（於 早稲田大学）に出席するため来日し、防研の研究者と意見交換のため訪問したものです。



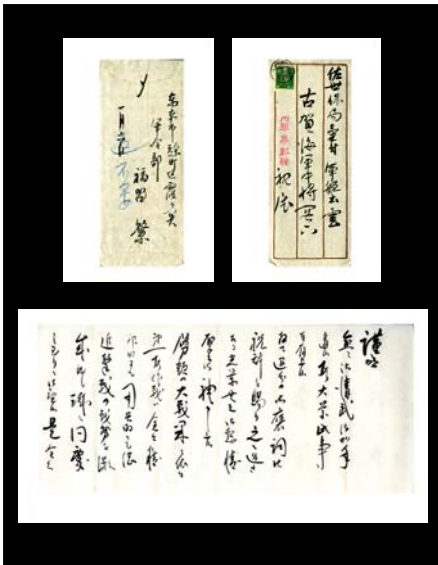
《 63期一般課程 》

1月は、「紛争と国際社会」、「軍備管理・軍縮・不拡散」、「経済と安全保障」、「地域安全保障1」、「地域安全保障2」、「東アジアの安全保障2」の各講座及び11個の各セミナーを実施するとともに、27日（水）及び28日（木）の2日間にわたり研究論文の中間発表を実施しました。さらに、政策シミュレーションの一部として兼原国家安全保障局次長による「国家安全保障と外交」と題した講義、また、高城株式会社セレブレイン代表取締役社長による「統率（リーダーシップ及びマネジメント）」と題した特別講義を実施しました。

.....「史料紹介コーナー」.....

平成27年度も、各都道府県出身の陸海軍将官の中から毎号一人を取り上げて、戦史研究センター史料室が所蔵するその人物などに関連する史料を紹介しています。

《 ^{ふくとめ}福留 ^{しげる}繁 1891~1971年 《
 一鳥取県出身の海軍中将一



古賀峯一宛福留繁書簡 (登録番号: ⑨古賀-8-2)

福留繁中将は、明治45年7月、海軍兵学校(40期)を卒業後、連合艦隊兼第1艦隊参謀長、軍令部第1(作戦)部長などの要職を務めています。この史料は「古賀峯一宛福留繁書簡」で、大東亜戦争開戦直後の昭和17年1月6日、軍令部第1部長の福留少将が支那方面艦隊司令長官の古賀峯一中将(後の連合艦隊司令長官)に宛てた書簡です。この中で福留少将は、開戦「劈頭の大戦果に依り第一段作戦は全く精神的にも用兵的にも総追撃戦の戦勢を激成致し誠に同慶の至りに御座候、是全く山本長官の不退転の決意と非凡の統率に因るもの之有」、しかし「今日迄の戦果の如き未だ小成に過ぎず前途の遼遠困難測り知るへからさるもの有之候に對し真に肝胆を砕きて有終の美を濟さざるへからさるものと深く覚悟罷在候、何卒倍々御教示御指導賜り度」と記しています。



台湾沖航空戦並びに関連電報綴 (登録番号: ④電報-63)

軍令部第1部長を経て古賀連合艦隊司令長官の参謀長を務めた福留中将は、昭和19年6月15日、第2航空艦隊司令長官に任命されます。第2航空艦隊は比島決戦のために新編された部隊で、その主力は九州南部に展開中の第6基地航空部隊でした。昭和19年10月12日、米機動部隊は比島上陸に先立って、日本本土との中継地にあたる台湾を空襲して日本軍の増援を阻止しようとします。これに対し第2航空艦隊は、基地航空部隊の全力をあげて米機動部隊を攻撃、特に夜間又は台風などの悪天候下の雷撃を専門とするT攻撃部隊(TはTyphoon(台風)又はTorpedo(魚雷)の頭文字)は、空母9~13隻撃沈の大戦果を報じます。しかしこれも誤報と分かり、その後の作戦に大きな影響を及ぼしました。この史料は「台湾沖航空戦並二関連電報綴」で、T攻撃部隊等の電報が綴られています。

《お知らせ》

史料保存のためのマイクロ撮影こともない、一時的に閲覧できない史料があります。

詳しくは、防研ウェブサイト「閲覧が一時不能となる史料」をご覧ください。

※ 記事に関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。なお、記事の無断転載・複製はお断りします。
 防衛研究所企画部企画調整課
 専用線：8-67-6522、6588 (史料紹介コーナーのみ6668)
 外線：03-3713-5912
 FAX：03-3713-6149 ※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>